

郭公をちかへりなけう。なひ。ごがうちたれがみのさみだれの空

〔松屋筆記 百三〕童女放

万葉集十六卷_右八丁竹取翁歌に、○中按童兒をワラハと訓直したるはよろしからず、舊訓に従てウナキとすべし、初段の童子を、舊訓にウナキとせしは誤也、いかにといふに、初段は竹取が童子の時をいひ、二段は少女の貌をいへればなり、然てこの詞の意は、少女が黒髪を、眞櫛もて搔垂て放にもし、又戯に取つかね、童子の總角の貌にもなし、又それを解亂して、髻髪にもして見るよしなり、

同卷_左十六に、古歌曰、橋寺之長屋爾、○中按若冠女は、男子の未冠のほどを、女の事に借用て書る也、著冠は男子の已に冠せしを借用たるにて、結髪せし女子にいへる也、古き歌の意は、橋寺の

長屋に、吾率宿せし放髪_{ウナキナリ}は、今比は、ねびまさりて結髪し、男持たらん歟と思ひやれる也、允恭紀七年に、妾初自結髪_{カキアゲ}陪於後宮、既經多年と見え、万葉集七の卷に、未通女等之放髪_{ウナキナリ}乎木綿山と

も、伊勢物語に、くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬともよめるみなおなじ、竹取物語_抄本_上に、此ちごやしなふほどに、すくくとおほきに成まさる、三月ばかりに成ほどに、よきほどなる

人に成ぬれば髪あげなどさたして、髪あげせさせ裳著す、帳のうちよりも出さずとも見ゆ、長年が改たる歌の意は、橋の實の紅く生て、おひ立る長屋に、吾率宿したりし童女は、今比はおよづけて放髪_{ウナキナリ}に髪をや舉つらんと、おもひやれる也、いづれにしても聞えたる歌也、これを一を取て、一をば誤としたる説どもは、宇奈井波那理のさまを解得ざるゆゑなり、そもくうなるばなりは、中の毛を項_{ウナジ}の上の處に束ねゆひ、其外廻りの毛をばたれさげ、肩にくらべ切て、放髪にしたるゆゑの稱也、今世女兒の禿髮_{カクハ}といへるに、これに似通ひたる體あり、項_{ウナジ}は、ボンノクボにて、ウナジノクボとも、俗に、ボンノクドとも云これ也、